
字義通りと過剰般化の精神発達

楡の会こどもクリニック

石川 丹

キーワード：字義通り、過剰般化、言語発達、抽象性、自閉症、同一性保持要求

要旨

父親に「イエスと言ったら肩車をして上げる」と言われ、「イエス」と言って肩車をしてもらった自閉症児は、その後「イエス」という言葉を『肩車』を意味するものとして使うようになった、と Kanner は記載しこれを“字義通り”と称した。この字義通りは自閉症児がしばしば発揮する強い同一性保持要求に起因する。だから、能記と所記のマッチングが強すぎるために一般的ではないその子独特の“その子語”の一種という事が出来る。

健常の言語発達においてもしばしば認められる過剰般化、例えば、犬も馬も象も「ワンワン」と言う場合、は抽象性が高い言語表現であるので、大人は直ちに否定してはいけない。その多彩な意味を理解して子どもがコミュニケーションしようとしている努力を尊重することが、後の適切な言葉の発達に繋がることを理解すべきである。

字義通りと過剰般化は発達的に positive な意味を持つので、児が字義通りと過剰般化を発揮した場合は支持的に関わることが重要である。

I. はじめに

子どもの心の発達を促そうとする時、専門家は父母にまずは言語の本質と言語発達の機序を理解してもらえるように説明し、その上で最も有効な言葉掛け方法を父母に伝授することが重要である。

本稿ではまずは言語発達の基礎を説明し、次いで自閉症児がよく示す字義通りと健常児でもしばしば認められる過剰般化の発達の意義を論じ、字義通りと過剰般化を応用した言葉を促す方法そして問題行動を抑制する方法の二つを紹介する。

I I. 言語¹⁾

言語学は言語を意味論、音韻論、統語論、語用論という四つの分野から論じる。

1. 意味論

言語は表現と意味が一致すること、つまりマッチングすることによって成り立つ。表現を能記、能記に一致する意味を所記と言う。聞いてしゃべる言語つまり言葉の場合は発声音のまとまりが能記であり、読んで書く言語つまり文字言語の能記は一定の約束事に則った線の塊である。

初語の発達段階では能記所記は一対一対応（マッチング）が普通で、ワンワンという能記の所記は犬であって、秋田犬とかダックスフントとかの種は区別していない。一つの能記には一つの所記が一致するだけなので単純である。一つの能記にたくさんの所記がマッチする場合は抽象性が高くなることになる。初語の頃にはこの単純さが言葉の発達を促す原動力になっている。

2. 語用論

言語を介してコミュニケーションしている間に、意味論即ち能記と所記の一致を超えて会話の流れ（文脈）や状況によって所記が変わる場合、つまり言外の意味を通して相手の意図を理解する場合を論じる分野を語用論という。

例えば、ある人が隣りの人に「ボールペン持ってますか」と尋ねた時、意味論からすれば隣りの人は「持ってますよ」とか「持ってません」とか言葉でもって答えることが正しい。言葉を介したコミュニケーションを論ずるのが意味論だからである。しかし、語用論からすると、「ボールペン持ってますか」と尋ねられた人がしゃべらなくても、隣りの人にボールペンを渡してあげればそれで良いことになる。渡してあげればコミュニケーションが成立したことになるからである。語用論からすると「持ってますよ」とか「持ってません」とかという言葉は無くても、コミュニケーションが成立しているの、言語機能は発揮されたことになる。

III. 言語の発達²⁾

1. オノマトペ (擬声語、擬態語、擬音語)

ワンワン、ブーブー、マンマなどをオノマトペという。日本人は犬の泣き声をワンワンと聞き取るので、親が犬の能記をワンワンとして犬を指しながら赤ちゃんに「ワンワン」と声掛けすると、赤ちゃんは犬という所記とワンワンという能記の一対一対応を理解し易く記憶もし易いというわけである。アメリカ人は犬の鳴き声を「バウワウ」と聞き取っている。日本では赤ちゃんが犬を注視しながら「ワンワン」と言ったら言葉の成立である。これを擬声語と言う。

大人が赤ちゃんとボール遊びをする時に「ボール」と言いながら子に向かって投げると人は「ポーン」と言いながら投げるのが普通である。大人が子どもに「ポーン取っといで」と言って子どもがボールを取りに行ったら、子どもはポーンという能記の所記はボールであることを理解したことになり、ボールをポーンと命名したことになる。つまりオノマトペの成立である。ポーンは投げる仕草が源なので擬態語に相当する。

マンマもアムアムという咀嚼が源なので擬態語である。ブーブーは擬音語である。

オノマトペを子どもに教えるということは子どもにとっては言い易い言葉を教えられていることになる。1歳頃の子は犬とか自動車とかという発声音の纏まりつまり構音は難しいので、発音し易いワンワンとかブーブーに意味をくっつけてやることによって、能記所記の一致つまり言葉を学び易いように教育していることになるのである。

2. “その子語”

子どもの言葉の発達の遅れを心配している親が「ゴニョゴニョ盛んに喋ってるけど通じない宇宙語で困る。」と訴えることは稀ではない。この宇宙語は成人神経学ではジャーゴンと言うが、DSM-IV³⁾では音韻障害という。

宇宙語はその意味つまり所記を大人がしっかり聞き取れば通じなのである。少しでも通じたら、宇宙語は日本語に近づいた事になる。筆者は宇宙語は訳が分からないと一蹴するのではなく、その子特有の発声音の纏まり、つまり能記を使った未完成な日本語 (pre 日本語) として位置づけ、“その子語”⁴⁾と称してその発達の有効性を積極的に父母に説明している。

例えば、アミカキは歯磨き、コチョコレートはチョコレート、オトコナキはお好み焼き、キティチャは救急車、ウンチは運転、ゲンタは電車、ダエモンはドラエモン、カーサンはお礼口さん、アッホーはヤッホー、チャーミーはお休み、ゴッパは御馳走様、アッコはありがとう、ペーはいや、等々のその子独特の発声音の纏まり、つまり能記を筆者は“その子語”と称している。

物を手渡されてアアヤダワと言う子もいる。本人はお礼を言うつもりでアアヤダワと言っているのだが、“その子語”を大人が理解していないと、この子は変な子嫌な子だと誤解されてしまうという不幸なことになる。だから、“その子語”の理解が大変重要な事になる。

“その子語”をしゃべる子は頭の中では正しく言っているつもりだが、発せられると正しい日本語の音韻になっていない。靴をクプと言う子にお母さんが靴を指してクプと言ったところ怒り出し、お母さんがクツと言いつつ言い直したら納得した、という子がいた。

“その子語”をしゃべる子に、言い直しするように迫ると、しゃべらなくなってしまう場合があるので、発音が不明瞭でも大人は積極的に分かって上げるべきである。例えば、子どもが救急車をキティチャと言ったら、大人は否定しないで「そうだね、キティチャだね、

キューキューシャだね」と肯定的に対応しながら正しい日本語にそれとなく言い直して言い、通じている事を本人に知らせることの方が正しい日本語を育てることになる。

筆者はその子の名前が啓太なら“啓太語”と命名し、親に対しては「この子は日本語をしゃべるのが苦手だけど“啓太語”は得意だから、お母さんもお父さんも“啓太語”で話し、理解できたら正しい日本語に言い直し、他人に通じない時はどんどん通訳して上げて下さい。“啓太語”を沢山しゃべれば、段々正確な日本語に近づいて行きます。この子もお母さんお父さんも当面は日本語と“啓太語”のバイリンガルになって下さい。」と説明している。

I V. 字義通り（文字通り）literalness

Kanner の最初の論文⁵⁾には字義通りが以下のように記載されている。

ドナルドの父親はイエスとノーを教えようとして「肩車して欲しいかい？して欲しいならイエス、して欲しくないならノーと言いなさい。」とドナルドに尋ねた。イエスと答えて肩車してもらったドナルドは、それ以降「イエス」という言葉は『肩車して欲しい』という意味で使うように成ってしまった。イエスの意味が本来の肯定の意味に正しく訂正されるのには長い年月を要とした、との事であった。

これはドナルドにとって「イエス」という能記の所記は『肯定』ではなく『肩車』になってしまい、一般的には通用しない能記所記の一致が長く続いてしまったことを意味する。ドナルド特有の能記所記の一致が長く続いたのは自閉症の特徴である強い同一性保持要求の結果である。自閉症の子は思い込みが強いが故に字義通りを発揮し、思い込みの強さは周囲の人から見ればこだわりと見えることになる。Kanner は「一つの語の意味は明らかに動かし難く固執されて、その言葉を最初に獲得した内容以外に援用することは出来ない。」と記した。

この字義通りは“その子語”の一種とすることが出来る。

1. 事例

1) 「あかする」=『ウンチ出た』

3歳5ヵ月自閉症A君、(新K式DQ 75) はある日「あかする」と言い出して母は当初理解不能であった。しかし、A君から 大便の臭いがすることによって母は気づいた。大便をした後おむつを換える時いつも赤いマットの上に寝せてしているので、A君はおむつ交換を要求したのだ、と。

これは「赤する」という能記の所記は『ウンチ出た』というふうにA君独特の能記所記の一致を作り出し、“A君語”(“その子語”)を新たに作ったと説明できる。A君は言語の恣意性と象徴の有縁性という言語の特性を使いこなしており、能記と所記の距離を大きく²⁾して能記所記を一致させたという意味で、A君の創造性が豊かであることをも示唆している。

2) 「ありがとう」=『パンツ洗ってください』

9歳自閉症B君(田中ビネーIQ27)は排泄の粗相をしてパンツを汚した時にパンツを脱いで「ありがとうございます」と言う。B君の場合は、汚れたパンツを洗ってくれて『ありがとう』という意味が転じて『洗ってください』というお願いを意味する。

3) 「ピーポー」=『いや』

3歳精神遅滞C君(新K式DQ 62)は嫌な時に「ピーポー」と言って抵抗する。新生児期以降腎不全のためにしばしば救急車で緊急入院を繰り返していたC君に対して、母親は叱る時に「ピーポー呼ぶよ」と言っていたため、C君にとって「ピーポー」というオノマトペの所記は『いや』になってしまった。

4) 「ひよこさん」=『あっち行って』

4歳自閉症Dちゃんが言う「ひよこさん」の意味は『あっち行って』である。何故そうなったかというと、幼稚園に付き添って行っていた母が弟のおむつを換える時に「あっちでおむつを換えて来る」とDちゃんにアナウンスして年少組のひよこ組の部屋に行っていたから、という訳である。

また、「ママお仕事」の意味は『いや』とのこと、この訳はDちゃんの要求に母が答えられない時に母が「ママはお仕事があるから」と言っていたからとのことであった。

5) 自閉症E君、8歳、田中ビネーIQ66

かぜで掛った医者に向かって「コックさん」と言ってしまったE君に、母は「今度行ったら、すみません、と謝りなさい」と諭したところ、E君は「この間、コックさんと言って、すみません」と言ってしまったので母はまた困ってしまったとのことであった。母からすれば言うて欲しくないこと、つまり医者に向かってコックさんと言ったこと、をまた言ってしまったために、母はまた困惑したということである。

子どもは謝罪の意味をしっかりと伝えたという点では正解なのだが、母にとっては恥の上塗りになってしまったので困ったという訳である。

2. 言外の意味、語用論

上記の字義通りは発語に関する問題であるが、自閉症の人が言外の意味を理解出来ない場合を字義通り性と言うことがある⁶⁾。例えば、相手から「何考えてるんだっ(気をつける)」と叱られたのに対して「～について考えてました」と答える、以前に「出世払いで良い」と言われていたのを覚えていて何年も経ってから支払いに行った、などで、字義通りに解釈することに基づく行動である。

これは上記の四つの言語論では語用論という範疇に入る。語用論は言葉の意味はその時の文脈や状況によって変わり得ることを論ずる分野である。例えば、喫煙室に入って来た人がライターがポケットに入っていないのに気づいて隣りの人に「ライター持ってますか」と話し掛けたとする。意味論からすれば隣りの人は「持ってます」あるいは「持ってません」と答えるのが正しいが、語用論からすれば何も言わずにライターを取り出して火を点けて上げてしまっても正しいことになる。

語用論は発話状況に関係する意味と定義され、発話解釈における非言語的知識、発話された時の状況や文脈以上の文化的背景、言葉の社会的要因も研究の対象とされる⁷⁾。

聞き手の推理能力や思考の柔軟性あるいは想像性によって言語理解が左右することになるので、自閉症の人では言外の意味理解が困難になることがある。

3. 指示詞コ・ソ・ア(コレ・ソレ・アレ)の理解

会話する場合話し手は単なる事実に関する情報だけではなく聞き手の知識を重視しながら言語表現を調節している。例えば、子どもには易しく説明的に話す、事情が分かっている人には要点を伝えるだけで良い。話し手は相手に合わせて話し方を調節し、情報を相手を取り込み易いようにしている。指示詞や代名詞など文脈依存的に使用される傾向の強い表現は、特に聞き手とどこまで情報を共有しているのかという知識が、言語使用に直接反映してくる。

伊藤らは自閉症児のコッチ、ソッチ、アッチの理解の特徴を報告している⁸⁾。それによると自閉症児では話し手と聞き手(自閉症児)が向かい合った状態つまり対側条件では、話し手と聞き手(自閉症児)が同じ方向を向いている状態つまり同側条件に比べて、有意に理解が劣っていた。また、健常児の対側条件と比べても自閉症児は対側条件での理解が有意に劣っていた。自閉症児の指示詞理解の困難さは、他人の立場で物を考えることの苦手さ、つまり「心の理論」の困難および他者視点の取得困難と関係していることが示唆された。

1) 事例

11歳自閉症F君は母親が「そこにあるでしょう、～取って」と頼むと『そこって、どこ?』と言いながら見つけられなくて怒り出してしまう。母親に「ティシューの箱の傍の～取って」など場所を具体的に明示して言うように指導したところ、以降F君はスムーズに物を取ってくれるようになった。因みに本例のIQはWISC-IIIで89であったが、言語性IQ85、動作性IQ96、と差があった。

4. 字義通りに由来する問題行動とその対応としての異音同義語の使用

異音同義語による言葉掛けは強い同一性保持要求に基づく字義通りを解消させる効果がある。

1) 「おしまい」→怒る、「終わり」→怒らない

5歳自閉症G君は、お片づけの際に母が「おしまい」と声掛けすると怒って片づけないとのことであった。筆者の診察は母親の発達相談が主であるので面談している間子どもはおもちゃで遊んでいる。診察終了時筆者が「終わり、お片づけ」と声掛けすると、怒らないで

おもちゃを素直に片づけて退室したので母はびっくりしてしまった。

これはG君にとって「おしまい」という能記の所記は『怒り』になっていることを示唆している。G君は多分かつて終了する心構えが出来ていないのに、母から「おしまい」と言われながら無理やり終了を迫られた経験があって、怒みつらみが重なってしまっていて、そのため「おしまい」と言われると直ちに怒り情動が誘発されてしまって怒っていたのである。筆者が怒り情動とは繋がっていない「終わり」を使うことによって聞き分け良く行動できたという訳である。異音同義語の使用によって問題行動を予防できた。

2) 言いつけ守って上手く行かない

4歳4ヶ月の軽度精神遅滞のIちゃんは、保育園で給食をもらう時に横入りしたので先生に「後ろに並んで」と言われた。Iちゃんは自分の後に他児が並ぶとその子の後に行き、自分の後ろにまた別な子が来るとまたその子の後に行ってしまうとなかなか給食をもらえなかった。その後も「後ろに並んで」と言われる度に同様の並び方をしていたという。本児は先生の指示を律儀にしっかり守る利口な子なのに損をしていたことになる。

筆者は母親にこの子が繰り返して後ろに行ってしまう行動の意味を説明して、担任の先生には「～ちゃんの後ろに並んで」と後に付くべきお友達の名前を出して言ってもらうように頼むように指導したところ、先生は実行してくれたので以後は堂々巡りすることは無くなった。

3) 「でもね」と「だけどね」の違い

3歳11ヶ月の特定不能の広汎性発達障害のH君は、母が「でもね、～」と言うと言うことを聞かないが、「だけどね、～」と言うと言うことを聞くとのことであった。異音同義語の有効性に気づいた母親は「宥めたり、透かしたり、煽てたり」という子育ての原則を上手に実践できていると言えよう。

4) 換気扇→扇風機

5歳5ヶ月自閉症のJちゃんは、換気扇を怖がるようになり換気扇が付いているトイレは嫌がって入らなくなった。母親が扇風機と言うようにしたところ怖がらずにトイレを使えるようになった。

これは換気扇という能記の所記は恐怖になってしまっているが、扇風機という能記には恐怖という所記がないから恐怖情動は誘発されないということである。異音同義語を使って子どもの好ましい行動を促した母親の知恵は素晴らしい

V. 過剰般化、同音異義語

犬を「ワンワン」と言えるようになった子が、例えば馬も象も「ワンワン」と言う場合を過剰般化という。これは子どもの言語発達途上において決して稀なことではなく、直ちに否定してしまうべきことでもない。

犬も馬も象も「ワンワン」と言う子は恐らく全体像の内の四つ足に注目するからであろう。そうであるなら、四つ足という抽象性が分かっている事になる。7歳にして初語「ワンワン」を発するようになった重度精神遅滞の子が椅子を見て「ワンワン」と言った時、筆者は椅子の四本の脚に注目したその子の知恵に感動した。

やがて馬は「ウマ」、象は「ゾウ」と言うようになるのは、馬の顔の長さあるいは象の鼻の長さや耳の大きさに注目して識別できるようになるからである。この発達過程は全体的処理から部分的処理の方向に発達する子どもの認知スタイルの発達に依拠している。

「ワンワン」という一つの能記に『犬、馬、象』という多数の所記がマッチしていることになるので、過剰般化は同音異義語を使っていることになる。だから、過剰般化は抽象性の高い知恵の発揮ということが出来る。

1. 事例

1) 1歳10ヶ月のK君はヘリコプター、飛行機、飛んでる鳥を「ペペ」と言う。この子独特の過剰般化である。

2) 2歳9ヶ月自閉症L君（新K式DQ54）は転んだ時、寒い時、泣くのを我慢した時に「大丈夫だ」と言っていたが、食べて美味しかった時にも「大丈夫だ」と言うようになった。微妙な意味を込めた過剰般化である。

3) 3歳8ヶ月M君（新K式DQ54）は、希望が叶った時やうれしい時に「あったあった」

と言ひ、上手く行かない時や欲しい物が無い時は「なんなん」と言う。文学的才能を感じさせる過剰般化である。

4) 2歳0ヵ月N君は犬を「ウンウン」と言ひ、猫、ライオン、ヒョウを「チャーチャン」と言う。祖父宅の猫の名が「チャーチャン」だからだが、パンダを見て「チャーチャン」とは言わない。パンダと猫ライオンヒョウはどういうふうに区別しているのであろうか。

また、借りる、返す、描いて欲しい、読んで欲しい時は「貸して」と言うとのこと、これは抽象性が相当高い。

「うすちゃった」は『うさちゃん居た』を意味していたが、2ヵ月後には「うさちゃん居た」と正しく言えるようになった。

5) 2歳3ヶ月自閉症Oちゃんは、欲しい時に「ちょうだい」と言えるが、「どうぞ」と言うこともある。お友達に「ちょうだい」と言って渡してもらえないと、「どうぞ」と言い変える。これはこの子なりの異音同義語と言えよう。通じなければ言い方を変えている点は柔軟な言葉の使い方が出来ていると言える。また、「貸して」を言えるようになる前段階にあると考えて良い。

3歳1ヵ月時の新K式DQは92で、「貸して」と言って渡されると「ありがとう」と答えるようになって会話が成立したのは3歳3ヵ月であった。

6) 2歳7ヵ月自閉症P君(遠城寺式DQ62)はジュースを飲み終わると母を突っついて注意を向けさせ、合掌してごちそうさまのポーズを取ることができる。「アッチ」は『向こう、熱い』を意味し、「ジー」は『ジュース、自転車、牛乳』を表す過剰般化を使っていた。

母親を「ママ」と言っていたが「ワンワン」と言い出したので母が否定しているうちに「ママ」も言わなくなってしまった。これは過剰般化語が通じないのでコミュニケーションの道具として使えないと認識したが故に失語に陥ってしまったと考えることが妥当である。

7) “一番”の意味変更

5歳自閉症Q君は何でも一等賞がマイブームで、お風呂も「一等賞」と言ってすぐ出ようとする。そこで、母が「ちゃんと洗えたら一等賞。早いのが一等ではありません。」と声掛けしたところ、全身しっかり洗うようになってしまった。同じ言葉でも意味内容を変えて、つまり同音異義語を使って成功した。

2. 言語表現の正確さより通じることが大切である

上述のように過剰般化と称される言葉の使い方は抽象性が高いということが出来るので、内在する認知機能の高さの表れである。だから頭から否定してはいけない。

表現が理解しにくくても意味内容が分かれば、つまりコミュニケーションの道具として成り立っていれば良いのである。人と人との相互交渉と分かり合い、つまりコミュニケーションが先にある、その結果として言語は習得されるのである⁹⁾。

意味が通じていることを子どもに伝え返して、語彙の豊富さへの発達を見守り受容するのが大人の役割である。子どもの発達を促す時、待ち、も重要な教育方法の一つである。

引用文献

- 1) ソシュール, F. : 一般言語学講義, 岩波書店, 東京, 1940
- 2) 石川 丹: 遊びは言葉を育てる. 小児科臨床 60:2153-2159, 2007
- 3) 高橋三郎他訳: DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院, 東京, 1996
- 4) 石川 丹: 音韻の心理発達. 小児科臨床 61:2063-2069, 2008
- 5) Kanner L: Autistic disturbance of affective contact. Nervous Child 2: 217-250, 1943
- 6) 十一元三; 広汎性発達障害における強迫関連現象. 児精医誌 47:127-133, 2006
- 7) 秦野悦子, やまだようこ: コミュニケーションという謎. ミネルヴァ書房, 京都, 1998
- 8) 伊藤恵子, 田中真理: 指示詞コ・ソ・アの理解からみた自閉症児の語用論的機能の特徴. 発達心理学研究 17; 73-83, 2006
- 9) 南 雅彦: 語用の発達—ナラティブ・ディスコース・スキルの習得過程—. 心理学評論 49:114-135, 2006
- 10) 石川 丹: 概念の心理発達. 小児科臨床 61:1197-1203, 2008

1 1) 石川 丹：自閉症-理解と対応-. 小児科臨床 57 増刊:1525-32,2004